



連歌提綱抄天



伊地知文庫  
文庫20  
238  
1



連歌個目上

伊地知氏書冊

連歌提要上

而於則大衆

目録

- 一 發句之事
- 二 脇句之事
- 三 而連歌之事
- 七 やいり先や等
- 九 一字らるゝ
- 十一 つのて
- 十三 小しきら

- 二 同切字之事
- 四 牙三句之事
- 六 や文字之事
- 八 存ん富指のん
- 十 下句しきら
- 十二 下句し田
- 十四 下句し小田

十五 二世ノ文字

十七 六ノ字

十九 文字

廿一 十九てふと并廿六てふと

廿三 ぬノ字右ぬと平ぬと

廿五 重ぬと地ぬ

廿七 二五二四之事

廿九 看まし之句

卅一 ぬノ字白

卅三 假体字対字

廿六 六ノ字并

廿八 八ノ字とゆ

卅 九ノ字并廿四之事

卅二 九ノ字

卅四 隅ノ字

卅六 隅ノ字

卅八 隅ノ字

卅九 年句とてぬ体

卅二 後字より通して平に緩急

卅四 文字作のもの

卅五 わさりの字の事

卅七 くの字の詞

卅九 くの字の詞

卅六 平の字の事

卅八 平の字の事

卅九 平の字の事

連歌提要上

而於則大既

祭句之事

一 兼祚去祭句の半しりたまの前後は遠くはるかおもひ  
 こころがうきも記鳥りる小流に遊ぶまろ深と  
 今よけ河のさるなほこころのよなるいも上中  
 少くもくく一葉してはくくく **兼祚** 御要  
 擇喜集去祭句の百韻のくめたるこころおも  
 心巧くくく志も出まゝく長くく号歌と離ま  
 的定時節小舟くくくは祭句のくくくあや  
 片草の風雅長序のくくくはくくくくくくく





一の侍めてありやん御深くせんおまひい  
もちさむもちさく祭の共治りや  
常入してさくしよの祭あゆし十の祭あ  
たの祭りのほいさうなる首飾もや  
擇善集云李日景物の介祝言に傷離別を  
秋夜神祇の祭りと祭りさうして  
方角や祝言に神祇の合和は  
はとらりて下る神祇の合和は  
も付の祭りと祭りと祭りと祭りと  
まはる祭りと祭りと祭りと祭りと

ふめくおまひい雪平か事不託と  
くしおまひい

一の舞場の祭りと祭りと祭りと祭りと  
らりて祭りと祭りと祭りと祭りと  
ゆん

一の離別の祭りと祭りと祭りと祭りと  
ゆりて祭りと祭りと祭りと祭りと  
ゆん

一の恋の祭りと祭りと祭りと祭りと  
百拍子と祭りと祭りと祭りと

乃の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
のしりよの宗也といふ

一 在聖の宗もま不に至つてのゆかりとて又  
と次の人母の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
是も稀なる事とや細と及べし宗の宗といひけ  
たるゆかりとていふにふいふのまれば有るに馳  
と宗の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
の宗もいふにふいふのまれば有るに馳

一 釈の及宗の或いふ宗の追善経文の取佛名  
号の連奇のわらわりの宗塔供まゝの法樂  
宗といふにふいふのまれば有るに馳

一 神祕の及宗の宗の法樂宗といふにふいふのまれば有るに馳  
ゆつとまも也又とゆつとまも也又とゆつとまも也又とゆつとまも也  
先といふにふいふのまれば有るに馳

一 十の法樂の及宗の宗の法樂宗といふにふいふのまれば有るに馳  
の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
の宗もいふにふいふのまれば有るに馳  
の宗もいふにふいふのまれば有るに馳



新しむらゝるゝん風情はなごり  
しゝれゝらゝるゝんあゝなごり  
受取ゝらゝるゝんあゝなごり  
あゝなごりゝらゝるゝんあゝなごり  
あゝなごりゝらゝるゝんあゝなごり  
あゝなごりゝらゝるゝんあゝなごり  
あゝなごりゝらゝるゝんあゝなごり  
あゝなごりゝらゝるゝんあゝなごり

同 切字之事  
切字十八の切字は、その由来の名目から  
おぼつかず異記ありて一考するに、  
いふ可限は、おぼつかずと云ふ

一 哉 兵とれ  
二 ぬ 身し  
三 切 字 切  
四 切 字 切  
五 切 字 切  
六 切 字 切  
七 切 字 切  
八 切 字 切  
九 切 字 切  
十 切 字 切  
十一 切 字 切  
十二 切 字 切  
十三 切 字 切  
十四 切 字 切  
十五 切 字 切  
十六 切 字 切  
十七 切 字 切  
十八 切 字 切  
十九 切 字 切  
二十 切 字 切  
二十一 切 字 切  
二十二 切 字 切  
二十三 切 字 切  
二十四 切 字 切  
二十五 切 字 切  
二十六 切 字 切  
二十七 切 字 切  
二十八 切 字 切  
二十九 切 字 切  
三十 切 字 切  
三十一 切 字 切  
三十二 切 字 切  
三十三 切 字 切  
三十四 切 字 切  
三十五 切 字 切  
三十六 切 字 切  
三十七 切 字 切  
三十八 切 字 切  
三十九 切 字 切  
四十 切 字 切  
四十一 切 字 切  
四十二 切 字 切  
四十三 切 字 切  
四十四 切 字 切  
四十五 切 字 切  
四十六 切 字 切  
四十七 切 字 切  
四十八 切 字 切  
四十九 切 字 切  
五十 切 字 切

一 哉 兵とれ  
二 ぬ 身し  
三 切 字 切  
四 切 字 切  
五 切 字 切  
六 切 字 切  
七 切 字 切  
八 切 字 切  
九 切 字 切  
十 切 字 切  
十一 切 字 切  
十二 切 字 切  
十三 切 字 切  
十四 切 字 切  
十五 切 字 切  
十六 切 字 切  
十七 切 字 切  
十八 切 字 切  
十九 切 字 切  
二十 切 字 切  
二十一 切 字 切  
二十二 切 字 切  
二十三 切 字 切  
二十四 切 字 切  
二十五 切 字 切  
二十六 切 字 切  
二十七 切 字 切  
二十八 切 字 切  
二十九 切 字 切  
三十 切 字 切  
三十一 切 字 切  
三十二 切 字 切  
三十三 切 字 切  
三十四 切 字 切  
三十五 切 字 切  
三十六 切 字 切  
三十七 切 字 切  
三十八 切 字 切  
三十九 切 字 切  
四十 切 字 切  
四十一 切 字 切  
四十二 切 字 切  
四十三 切 字 切  
四十四 切 字 切  
四十五 切 字 切  
四十六 切 字 切  
四十七 切 字 切  
四十八 切 字 切  
四十九 切 字 切  
五十 切 字 切

作例

哉 韻 上 詠 へ 五 文 字 一 中 一 也

月 乃 秋 紀 乃 朝 也 祗

名 保 一 也 乃 舟 也 行 一 因

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

也 也 一 也 乃 舟 也 行 一 乃 古 也

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

又 七 文 字 一 中 一 也

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

けい 乃 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

哉 一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

一 舟 也 行 出 一 乃 六 本 也 已

此の程の事なれども

はるばるの事なれども  
又此の事なれども  
かゝる事なれども

板の事なれども

此の事なれども

年浅き事なれども

但し此の事なれども  
約し此の事なれども

此の事なれども  
後世に此の事なれども

此の事なれども  
又此の事なれども

君は侍ありはるる  
よからんことあり

ふかき君侍に  
あつた人あり  
とふれ  
せりてはら  
初之井海  
ねと  
つとれ

川杜徳巴

か  
もけ侍あり

お風や  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

格まやとていふは

柏

手滑朝に舟が石敷くやうなうまうまの舟に記あり  
け回流石に舟しり

まのやとていふは

津見やとていふは

らとていふは

又のやとていふは

の

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

まのやとていふは

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

口疑也

新しき星のしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

つて  
長く夏、あつたつたつて  
そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

そのしるしはさうしてそのしるしはさうしてそのしるしはさうして

舟後河舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、

物、あまの、とてあまの字とす、

麻乃舟の舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、  
舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

舟舟の、とてあまの字とす、

六 現在巴折にせしむるに現をい入

青柳のついでに遠くへ去る鹿 紙

玉のふりかたをわきまへし 昔の事 桂

梅のついでに遠くへ去る鹿 紙

夜半の名をよみまをし 昔の事 巴

涙のまきえぬ事か 昔の事 紙

毎夜

とちかへきこふ声切をきき 遠くへ去る鹿

ふくまふをきき 昔の事か 紙

あし鳥を愛し

一 素一説にまが又二説に 中とと素集の

しとて説ある 不用之 濁多の 未

来

ふるえらういふれおし 山橋 紙

まじりて 素集に 田部 柏

ついでに 此の昔と 柳 全

ぬき

ぬきのまじりてはの字活してあかひにぬき

海の子をききぬき 不ぬき 不ぬき 不ぬき





あはれはつはつとをえはるる雨哉  
此なきはつはつとをえはるる雨哉

清きる世ありて春の春 初

橋より貴業ありて春の春

花より入る雨と云は

渡りしはあはれつと云は

香瑞ありてはあはれつと云は

けんけん

十一

清きしはあはれつと云は 柏

子日しはあはれつと云は 比

十二

あはれつと云はあはれつと云は 祇

一なりしはあはれつと云は 休

うらあはれつと云は 比

麻の中のまはあはれつと云は 巴

あはれつと云はあはれつと云は

あはれつと云はあはれつと云は 頑

あはれつと云はあはれつと云は 我

あはれつと云はあはれつと云は

鹿の苑くしつみかみくし

長しそとせしむる者のつらみの 定家

つらまのいふくしつらむるんぬ

つらまのいふくしつらむるんぬ 西行

又のいふくしつらむるんぬ

百すのこの五月と事ある花は 祇

やえ 花の侍ありて今源をわとくす

そとくしつらむるんぬ

那えやのむるのいふ花 哉

白くやのむるのいふ花 祇

あつたにむるのいふ花 巴

あつたにむるのいふ花 巴

あつたにむるのいふ花 巴

あつたにむるのいふ花 柏

あつたにむるのいふ花 祇

あつたにむるのいふ花 祇

あつたにむるのいふ花 祇

あつたにむるのいふ花 巴

あつたにむるのいふ花 巴 哉

あつたにむるのいふ花 巴



秀句くしひひしめさるるこころ統一白不丁  
可く

毎神をいひおぼの白如 祇  
と書作るる白の目録の 長

口傳切書在る

港 尺つ保つのか

層の考り秋も去るつ言好家

橋もあつたれらんら 橋のむ

次九

森引の

一歩のこころはあつた

秋はとほまゝのまゝのまゝ

あつた 秋んららら

月あつたし庭の白の秋の目、 我

子親なるらん山路の傳ひ 休

秋風もあつたし 秋の病 報

正知 成敗の目もあつたし 秋の目もあつたし 秋の目もあつたし

切字の目もあつたし 秋の目もあつたし

あけの目もあつたし 秋の目もあつたし

はなれせあつたし 秋の目もあつたし

秋の目もあつたし 秋の目もあつたし

秋の目もあつたし 秋の目もあつたし



宛てての宛ての宛ての宛て

月夜に... 宛てての宛て

雑体 本... 宛てての宛て

夏に... 宛てての宛て

し... 宛てての宛て

宛てての宛て... 宛てての宛て

宛てての宛て... 宛てての宛て

宛てての宛て... 宛てての宛て

宛てての宛て... 宛てての宛て

し... 宛てての宛て

行... 宛てての宛て

し... 宛てての宛て

し... 宛てての宛て

し... 宛てての宛て

し... 宛てての宛て

し... 宛てての宛て

し... 宛てての宛て

し... 宛てての宛て

宛てての宛て... 宛てての宛て

去の細女お静さうと感さるまじし松屋ハ  
きこしきよきあめかきしうらぬこころを  
かくしし留若の作書さうさうさう

伊原より

寂しき心は海を渡る 頌  
是もあまのこころなる(Shirayama no  
Izumi no Umi no Umi no Umi)

ふたつ海を渡るは

去のこころなる(Shirayama no Umi no Umi no Umi)  
海を渡るは(Shirayama no Umi no Umi no Umi)  
静かき心は(Shirayama no Umi no Umi no Umi)

の作書し

依りて

国はあはれなる

二人はあはれなる

去のこころなる(Shirayama no Umi no Umi no Umi)  
向は(国)の松屋さうさうさうの歌  
なる(心)なる(心)なる(心)なる(心)  
あはれなる(心)なる(心)なる(心)なる(心)  
そ上右の二俣し

向の仲して(心)なる(心)なる(心)

月あはれなる(心)なる(心)なる(心)



この五文字の間にあはれおほき書かす朝の日の  
えし月とてかたじけなくもつららぬと五  
文字とてあはれ合ふてしるす(おほき)の書かす  
おほき書

おほき書かすの書かすの書かす  
おほき書かすの書かすの書かす

おほき書かすの書かすの書かすの書かす  
おほき書かすの書かすの書かすの書かす  
おほき書かすの書かすの書かすの書かす  
おほき書かすの書かすの書かすの書かす

おほき書かすの書かすの書かすの書かす  
おほき書かすの書かすの書かすの書かす

おほき書かすの書かすの書かすの書かす

おほき書かすの書かすの書かすの書かす  
おほき書かすの書かすの書かすの書かす

おほき書かすの書かすの書かすの書かす

おほき書かすの書かすの書かすの書かす  
おほき書かすの書かすの書かすの書かす

おほき書かすの書かすの書かすの書かす

此の世に於ては、  
世に於ては、  
世に於ては、  
世に於ては、

世に於ては、  
世に於ては、  
世に於ては、  
世に於ては、

世に於ては、  
世に於ては、  
世に於ては、  
世に於ては、

新金造八柳川前住家  
書引の親彦源し第廿日

書引の親彦源し第廿日  
書引の親彦源し第廿日  
書引の親彦源し第廿日  
書引の親彦源し第廿日

百十二  
おぼやかし出た金造八位の家

おぼやかし出た金造八位の家  
おぼやかし出た金造八位の家  
おぼやかし出た金造八位の家  
おぼやかし出た金造八位の家



松風も徳も出ればと替る夢  
此縁がしあひと 爲栂  
今日このはなを言ふ事  
七  
此傳切縁をく

之母の奈りくさすもいふ

松白く嵐や暮る座のん  
月細く梅もさかたえん  
名そこり月梅もたつん

八  
此傳切縁をく

大廻り 大掃ちん

河川もいしとていふ玉津橋  
いふもゆ風道ゆく秋の月

三十  
三設

三設切縁をく

五月雨の松風も水 周阿  
大まきく 三設切縁をく 秘中 秘重 而 秘傳

かりく

け外伝たる 切字五目

三  
脇白く事

祇去 隅田川 登り 三月 けり けり けり けり

しつゝさうしつゝの思ふなりし思ふなりし  
と兼てかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ  
月かきし思ふなりし思ふなりし思ふなりし  
此後作くしつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ  
思ふなりし思ふなりし思ふなりし

落葉 同言之思ふなりし思ふなりし思ふなりし  
しつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ  
よる思ふなりし思ふなりし思ふなりし思ふなりし  
かゝる思ふなりし思ふなりし思ふなりし思ふなりし  
の思ふなりし思ふなりし思ふなりし思ふなりし

しつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ  
なすめしつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ  
しつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ  
しつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ

しつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ

落葉 去 体 兼 義 思ふなりし思ふなりし思ふなりし  
の思ふなりし思ふなりし思ふなりし思ふなりし  
片にやふかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ  
樹の作りしつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ  
又思ふなりし思ふなりし思ふなりし思ふなりし  
かりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝと兼てかりつゝ  
思ふなりし思ふなりし思ふなりし思ふなりし

高し風を船橋く枝なりしやの衣る形も珠玉  
履去（赤井） 袂ハ衣りし道して何と云ふも  
客の道歩ありし末の七ふもの衣は結らざる  
衣もわが衣を

比去之利（赤井） 注及高し道より衣成（高し）  
たる魚

古抄宝花（赤井） 袂のちこ（赤井） 袂のこ（赤井） 袂のこ（赤井）  
一道の目派従ふ衣（赤井） 一  
脇の二道牙（赤井） 一（赤井） 袂  
字枚云袂ハ四季（赤井） 一（赤井） 袂

とらぬ法は境の事もはし 枚

け白袂はま（赤井） 一（赤井） 袂  
袂ハ何（赤井） 一（赤井） 袂  
袂（赤井） 一（赤井） 袂  
又と何（赤井） 一（赤井） 袂

古抄云袂ハ胸（赤井） 一（赤井） 袂  
一（赤井） 袂

け袂（赤井） 一（赤井） 袂  
十白（赤井） 一（赤井） 袂

あめりかへし月入りあまのしるほ有てあまの  
の二十のしあめりかへしあまのしるほ有てあまの  
あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの 柏

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの  
あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの 雲伊

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの  
あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの  
あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの  
あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

あまのしるほ有てあまのしるほ有てあまの

衣の祭の小徳を祈りかゝる昔おれも多財婦  
といふ説之用事即ち早下流の事  
神祇崇信等の祭の協り又その心あらしむ終し  
才こそすしハいふ

こゝの折ふも本懐の祭の使事か又折ふに律を  
他人の身の時ハ祭の節こそさるる也

あゝさう然と云ふ古辰 和

こゝの祇云旅行のあぢ〜をなされいつの事  
あ〜ん〜情とま〜れ〜 常々松  
ま〜らねる〜の心あ〜也

还懐の人々を招きの青坊ふえまされ〜入らぬの心

つひいし奉り可

法撰  
ま〜さ〜い〜れ〜ん〜と〜ら〜ん〜と  
や〜の〜の〜成〜し〜ま〜ら〜る〜也

早下の祭の小徳も早下の律とつらぬり結たむ

小徳の心〜こゝ他人の身の時ハ早下の心〜成りぬ

少財令祈りしの心

あ〜ぬ〜心〜と〜ら〜ぬ〜心〜 和

知の心〜た〜る〜心〜 和

算〜ハ〜射〜の〜心〜早下〜の〜心〜ハ〜祭〜の〜心〜也  
〜



後序の奈も小綴のいさふさう金さるまのいさふさうし  
結末や東家集ふし秋の巻後者  
あそくいさふさうし一年 宗長

このまゝと後の時西般 四二東因府定海と  
一巻一巻の秋の巻結末と秋の巻後者  
結末のいさふさうしお侍ハけりれも  
あつ後序の綴もさうしちり付定まらし  
照小対句の体や昔物やとと奈のし一巻と対  
句の及れり小柳と対句の海と対句の山と対句の  
心と対句しこの海は二二二

名の綴り子親とわらうま  
卯のまゝと暮暮や卯のま

この句の体と対句のうりは対句のまゝと対句の

あのみ屋一ちや 白い梅の花

辞上

藍もも枝を柳乃系 長

色字の対句しこのまゝと対句し

名とまゝとあそくまゝとあそくまゝと

まゝとまゝとまゝの 秋のまゝと

この句の体と見まゝとあそくまゝとあそくまゝと  
体とまゝと対句し

花もあつて花もあつては 徒事  
約巻もあつてあつては 徒事  
も對分ぬ 回年 一 侍り 花の 柳と 散る  
約中の 花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
を 花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る

花の 一 庭に 花の 柳と 散る 紙  
しゝあつて 一 花の 一 庭に 花の 柳と 散る

花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る

花の 一 庭に 花の 柳と 散る 紙  
しゝあつて 一 花の 一 庭に 花の 柳と 散る

花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る  
花の 一 庭に 花の 柳と 散る

花の 一 庭に 花の 柳と 散る

お困るに十たのむにむこい一但十たのむにむこい  
たつと作例たのむ

有るにむ  
さふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふ  
長

つゆたのむ  
あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
祇

悼桂十た  
あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
巳

あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
全

あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
一

弟にむさふさ

あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ

あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ

あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ  
あつたのむさふさふさふさふさふさふさふさふ



白く遊ばす心は思ふ様にはあらず  
弟にすくはるるはあはれなる  
但し徳教を信じて悟りては  
心は清く静かにありて  
諸事平に事とすべし

梅子の花はさくらと  
はなはたあはれなる  
玉露の清き水は  
心清く静かに  
ありては

春の心はあはれなる  
日新の心はあはれなる  
梅子の花はさくらと  
はなはたあはれなる  
玉露の清き水は  
心清く静かに  
ありては  
又、梅子の花は  
さくらとあはれなる



二條千代

田五郎

のうらな

まうらう

とら

田十

あは

岩

松

け

て

毎

し

森

の

富

こ

年

あ

て

あ

五  
田連歌之事

大勢の母をめぐりては中もあらじいさしあはれ  
の面をよの風をたはしめたる山吹の柱を  
浮ぬるやそののちを流るるやとてあはれ  
ふしむるやとて難おの風律をいへば  
をさす

旧況の母をめぐりては中もあらじいさしあはれ  
の面をよの風をたはしめたる山吹の柱を  
浮ぬるやそののちを流るるやとてあはれ  
ふしむるやとて難おの風律をいへば  
をさす

母をめぐりては中もあらじいさしあはれ

あやしめたる九つめ十つめふかき一省の母をめぐり  
傳統の藝文無けき別記あり

後集よりき連歌の句を其杖の句をいへば  
そのくは流るるやとてあはれ

あはれなるは二季三季の事一と母をめぐり  
毎夜この句のり四季の口は二季あり

二季ありは流るるやとてあはれ  
そのくは流るるやとてあはれ

流るるやとてあはれ  
そのくは流るるやとてあはれ  
二の事





あまのたねや、はらからひまわりを採るなり

あまのたねや、あまのたねや

月やあまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね

けしきはやあまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね

あまのたねのあまのたね

あまのたねのあまのたね

あまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね

あまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね

あまのたねのあまのたね

あまのたねのあまのたね  
あまのたねのあまのたね

源を採りて傳へし

しに申すは、  
しに申すは、  
しに申すは、

五

申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

しに申すは、

七  
拾也

羽や若やのや拾てともしや拾てゆや  
他字や若行かきく徳て物也

宝極子新しき上巻のや若やや新巻の巻に

とも二流の傳ふ上巻のや若や拾の類しとあり

拾後を句しとて拾やとて拾はるる

活拾也

ロロロロロロロロロロロロ

オオオオオオオオオオオオオ

民あ〜國は保まらぬ也

拾後積ふ若やの子拾也とて拾はるる

拾てゆや拾はるる拾はるる拾はるる

拾はるる拾はるる拾はるる拾はるる

とるる命あ〜若や拾はるる拾はるる

若や若や若や若や若や若や若や若や

若や若や若や若や若や若や若や若や

若や若や若や若や若や若や若や若や

若や若や若や若や若や若や若や若や

若や若や若や若や若や若や若や若や

新吉部拾

あはははははははははははははははは

おはははははははははははははははは

拾後〜や分の中あはははははははははは

あはははははははははははははははは

おはははははははははははははははは

と云ふやのふし又讀ふをせむ

此の并るものさし  
いかにいれむか

この世しやうを想傳や又さし

羽やいかに同し

いしやうのふしやうのふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

ニヤトヨ

意負の傳やあはる

と云ふ又同じし

年

いしやうのふしやうのふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

秋のやうなふしやうのふし

浪路のやうなふしやうのふし

いしやうのふしやうのふしやうのふし

かゝる金ありては名もやと字もよみあはらむ  
とらむ

任事や岸浪をくちあへん

又川原や磯のや山原やあぢりや  
やゝも名をゆづりて若やの控やし

積たかのさかに  
山原や踏まへて見あはれ

はねし

千代松のやうなうらなひのまゝに  
らるるやうなうらなひのまゝに

しほのうらなひのまゝに

又新にほくや字のやとあはれ

古  
近頃のや境のよとまはれ  
うらなひのまゝに  
初原のやと概のやとあはれ  
あゝのやと概のやとあはれ

よあはれこの字に名もあはれや  
よあはれこの字に名もあはれや

助字やとあはれや  
よあはれこの字に名もあはれや

福之長文うらなひのまゝに  
よあはれこの字に名もあはれや



おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜

おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜

おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜

おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜

おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜  
おとめ〜おとめ〜おとめ〜



家母の母と母の母  
いふは母の母の母  
誰か母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母

母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母

母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母  
母の母の母の母

武州の川と海との距離  
先づいふに、河津の川  
流るる所の西の海に  
東の川より、秋の暮に  
こゝろを留めて、他の方へ  
さかして、川と海との  
分合を考へて、

碩果の川と海との分合の事

武州の川と海との分合の事  
武州の川と海との分合の事

武州の川と海との分合の事  
武州の川と海との分合の事  
武州の川と海との分合の事  
武州の川と海との分合の事

武州の川と海との分合の事

武州の川と海との分合の事  
武州の川と海との分合の事

武州の川と海との分合の事  
武州の川と海との分合の事

しちーG...  
あふふふふふふ

の...  
ま...  
ま...

福...  
能...  
...

中...  
長...  
秋...

け...  
...

く...  
九...  
一...  
...

一...  
ん...  
ま...  
...

宝...  
け...  
毎...  
...

新...  
あ...  
た...  
...



主一きり方からぬあて  
好た左字の人のみ

又五分中二下を物る

裁をいふもよ命令  
裁をいふもよ命令

又右五の押字

嵐波も又の  
おちりも同じ

毎日をいふけ五の作

又押字  
又押字  
又押字

後小  
後小  
後小

又じまの母のあてにこころ

悲かきあつたを物かきかきかき  
片やうかき ちりうかき

けがの押字のあてにこころのあてに  
こころのあてにこころのあてに

物かき 今かき ちりうかき

こころのあてにこころのあてに  
こころのあてにこころのあてに  
こころのあてにこころのあてに

こころのあてにこころのあてに

花鳥のこころのあてに

花鳥のこころのあてに

花鳥のこころのあてに

花鳥のこころのあてに  
花鳥のこころのあてに

下り向てあつた

下り向てあつた

花鳥のこころのあてに

花鳥のこころのあてに

花鳥のこころのあてに

十  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

宝櫃をくわくわくとあつちあつちの探字をきかぬ  
しるべは但探字の字に似てはしるべに似てはしるべ  
はしるべの字に似てはしるべに似てはしるべ  
あつちあつちの探字をきかぬ  
の探字の字に似てはしるべに似てはしるべ

取らぬとすれども  
あつちあつちの探字をきかぬ

け二句にてはしるべに似てはしるべに似てはしるべ

取らぬとすれども

あつちあつちの探字をきかぬ  
あつちあつちの探字をきかぬ  
あつちあつちの探字をきかぬ

あつちあつちの探字をきかぬ

あつちあつちの探字をきかぬ  
あつちあつちの探字をきかぬ  
あつちあつちの探字をきかぬ

あつちあつちの探字をきかぬ  
あつちあつちの探字をきかぬ

あつちあつちの探字をきかぬ

くさ苗しけ境能くも別とく  
古物之遺蹟くさ文字の小苗の恵もあはけ者  
小松入又山の日とて位は日とてあはけの歌はるも  
徳之老ノスサ

宛と月とをく徳の思ん

槿の垣子の落の故にん

羽衣の中とぬれ建歌はるくは都をさ奇  
もいふれかくしとあはけ但、やのの多う歌  
秋風くたをさくちあはけ右里小の山  
中吉のふはあはけとくもあはけからたはら

心遠くのふゆぬく

舟張あはけもくは律ふらう

碩家訓

うたののあはけは徳

けりあはけ

あはけは徳

とくは徳

小松あはけは徳

もは徳のあはけは徳

てあはけは徳



花〜又〜さ〜ふ〜い〜ら〜つ〜と〜多〜る〜茶〜は  
その〜と〜い〜致〜る〜あ〜ん〜と〜先〜賢〜ト〜い〜ひ〜  
ふ〜よ〜く〜あ〜る〜い〜じ〜る〜ま〜め〜と〜併〜は〜と〜ら〜い〜と〜く  
肖相傳下知詞あのいかと留し候を

い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

トあらまじりトあらまじりトあらまじりトあらまじり

い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

古傳のい〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い 現世の

い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い 連繫の

多〜一〜編のい〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

ておか〜〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

<sup>十四</sup>下の句はい〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

古抄一同ノ説下のいま〜ま〜い〜ま〜ま〜い昔の奇のいま〜ま〜い

い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

口傳はい〜ま〜ま〜い〜ま〜ま〜い

垂啓昌休百平十回百二十句下の句はい〜ま〜ま〜い  
之由之一二句をいま〜ま〜い娘才十和妻のいま〜ま〜い

我々市井を以て一と爲す  
と愚るべし後世に席を以て

民の類を朝を以て

と信ふは其の對二もさし懐かきもの  
依りて其のけりなり一他は依りて

十五  
三十一

一文字を以て現を以て其の居るは  
之れも字を以て現を以て其の居るは  
一現を以て其の居るは

又一見たりとキイタ  
一見たりとキイタ

一文字を以て現を以て其の居るは

又現を以て其の居るは

を以て現を以て其の居るは  
白一

一文字を以て現を以て其の居るは

又現を以て其の居るは

一文字を以て現を以て其の居るは

一文字を以て現を以て其の居るは

一文字を以て現を以て其の居るは

一文字を以て現を以て其の居るは

一文字を以て現を以て其の居るは

字：きりしあ外しあに

古傳秘書多ふ湯かゝり字をさうし

まいごうとらういそぐ

この字は現をまぬに切字をかゝるは

ひきかた字とありあつたはひきかた

中にもあつたり

二冊一冊のあつたはえ一冊ちりり

ふりあつたは字はあつたはあつたは

下はあつたはあつたはあつたは

柏

流曲しこの字は二と一  
根 硯

脚ハあつたはあつたはあつたは  
根

可もけとまうとまうとまう

新古  
ソウのまうとまうとまうとまう

まのあつたはあつたはあつたは  
まのあつたはあつたはあつたは

その字の事

其の字も苗

その字も苗  
その字も苗

ウクスツヌ  
ウキルウ  
けあま下をさうしあつたはあつたは

かゝる音に答へたる先づいふ事あり  
秋風をかく  
あはれけられたり  
母をばよ  
あはれもたまひ  
源一さま  
んぞとあらぬ  
あはれもたまひ  
かゝる事あり

あはれもたまひ

かゝる事あり

あはれもたまひ  
かゝる事あり  
あはれもたまひ  
かゝる事あり

あはれもたまひ

あはれもたまひ

あはれもたまひ

あはれもたまひ

あはれもたまひ

あはれもたまひ

般若の後のヤマと 彼佛

さうして唯らうと

又奇ふい推るゝと

人の心先をうと

本行川流うー

又心先をうと

本行川流うー

本行川流うー

本行川流うー

さうして唯らうと

いし推るゝと

あつたの音

あつたの音

あつたの音

あつたの音

さうして唯らうと

さうして唯らうと

十七  
あつたの音

大なるてまの押字ハ音の牙の音 エケセリ子

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

右のまの押字ハ音の牙の音 エケセリ子

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

徒言ハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

カシタリハ ハ 音者ある能くハカセニヤ

歌くもやう絶るる歌

そあまのいふし一のあま

歌ふまのまをさしをゆきまの十九てあま

てふんあまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

細くあまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

如互

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

又下りのあまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

古

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

又あまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

あまのまのまをさしをゆきまのまをさしをゆきまのま

又一体





ふまゝにふまゝに  
ふまゝにふまゝに  
ふまゝにふまゝに  
ふまゝにふまゝに  
ふまゝにふまゝに

ふまゝにふまゝに  
ふまゝにふまゝに  
ふまゝにふまゝに  
ふまゝにふまゝに  
ふまゝにふまゝに

ふまゝにふまゝに

ふまゝにふまゝに

ふまゝにふまゝに

ふまゝにふまゝに

ふまゝにふまゝに

とゆへに女の方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

三つに於ては、  
お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

仲註：此の文は、  
お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

右の文は、  
お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

舟渡りも連舟物にて、  
お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく  
お住いの方の事にはさういふ事もなく

しんせいの後の後やのつてたつた  
海よぬきしてしんせいのつてたつた

のつてたつたつてたつたつてたつた  
はつたつたつたつたつたつたつたつた  
月とつたつたつたつたつたつたつた

又甲斐のつてたつたつたつたつたつたつたつた  
旅舞つたつたつたつたつたつたつたつたつた

又海守ぬきつたつたつたつたつたつたつたつた  
平のつたつたつたつたつたつたつたつたつた

又にしんせいのつたつたつたつたつたつたつたつた

又探金つたつたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

又探定のつたつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつたつたつたつた



衣の夕俤とははちのてかしく留めたるしきり  
わきのあふれおひしむん千夏万化鎖御の  
そとしらへ俤傳じうけてそえ悟とくし  
十一  
十九ておん毎十六のあまの  
十九ておんとどろく二つあふれしはのけい  
あしあし

歌くこもやうてはなごころ  
二家あふれ二つあふれしはのけい  
ておんのとどろく二つあふれしはのけい  
又 ぶんらうにそあめをけいあふれし

鴉羽舟まの海と清い

歌換らん清いらんこもく又  
親くまもれくはけて清い

清いねんといえんとあしきり  
けのあふれしはのけい  
こもあひいんとあしきり

あしきり清いあしきりあしきり  
いしきり清いあしきりあしきり

十六ておんといえんとあしきり  
いしきりや清いあしきり

おらんと二つあふれしはのけい  
あしきりいしきりあしきり

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

後興

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

終つていふことし一修を

おあつてはたし米のついで

とに首らう米を院ましてもあるは体し

あつてはたし油のついで

とに首らう米を院ましてもあるは体し

おあつてはたし米のついで

あつてはたし油のついで

作物ももるや米も明あんとさひつて又一年も

作物ももるや米も明あんとさひつて又一年も

又得たさいふのてまぢつて申ふは

おつてはたし米のついで

あつてはたし油のついで

君と待ふ米のついで

秋をたつてはたし米のついで

君と待ふ米のついで

あつてはたし米のついで

君と待ふ米のついで

秋をたつてはたし米のついで

あつてはたし米のついで

くせあまのまやこをみるを  
ニ光徳教に法はるるの御高村と書きたる御書  
をよみよき御書とて御書とて  
まよひのまやこをみるを

常徳の御書に法はるるの御高村と書きたる御書  
あり又の御書に法はるるの御高村と書きたる御書  
つとて御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
に御書

*(Small vertical inscription)*

けつとて御高村と書きたる御書とて御書とて御書

*(Small vertical inscription)*

并後富士の御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
一々の御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
多くと御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
御高村の御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
とて御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
つと御高村と書きたる御書とて御書とて御書

御高村の御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
御高村の御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
御高村の御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
御高村の御高村と書きたる御書とて御書とて御書  
御高村の御高村と書きたる御書とて御書とて御書





けりよしをぬかぬしはねねね  
くすくすのほろろとあはれあはれ  
こころよしのほろろとあはれあはれ  
あはれあはれとあはれあはれ  
あはれあはれとあはれあはれ

はなをぬかぬしはねねね  
はなをぬかぬしはねねね

あま〜

あま〜

あま〜

住吉やあまの海もあはれ

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜

あま〜



徳島 十八日

十七日 月

有り物借抄にて一月分の借入額を  
引当りしりて残額を  
引当りしりて残額を

引当りしりて残額を  
引当りしりて残額を  
引当りしりて残額を

引当りしりて残額を  
引当りしりて残額を

程云いし通り借入額は  
引当りしりて残額を  
引当りしりて残額を

引当りしりて残額を  
引当りしりて残額を  
引当りしりて残額を

引当りしりて残額を

首相傳おき首をいしり六五文字の紙末縁  
~~~~~しつてはるるひき

紙に引渡すはるる首をいしり  
~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

~~~~~しつてはるるひき

廿二 御衣子と書て通し 再びかき

引ノ字と 引ノ字と 無ノ字有無を

寫しはく 引ノ字の如く 引ノ字 引ノ字

かた歌に 引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

秘抄云く引ノ字の如くあるの字は優より劣なり

より引ノ字の如く劣なり劣なり劣なり

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

秘抄云く引ノ字の如くあるの字は優より劣なり

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

引ノ字の如く 引ノ字の如く 引ノ字の如く

けくくくくくくくくくくく

松

さくさくややくやく風やちりちり  
しりしりややくやく風やちりちり  
まじりまじり風やちりちり

そいそいそいそいそいそい  
そいそいそいそいそいそい

まじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじり

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふ

紅書

紅書の集つらるる様を打つて

しとらるる字とふノ字と魚子とて用

補 魚んらふ志とん 志を川 縁 元水

け既より

ちとつとあつてもやうな言井生流懐中巻

この年々の井ぶつくおにちからん

川ノ字とぬノ字とおおして用より

しをぬとやといつら 世を在り着たきの釋して

そのうととんやるらんをまよの

此ニ 仮名体字身字之書 異能取一字 増減

体字と身字といふはなごころ分字と助流といふ也

竹井つつの井

竹井の井竹ノ字ハ分字ノ流津津津

子ハ分字ニハ只ハあゆまこ

子ハ分字ニハ只ハあゆまこ

子ハ分字ニハ只ハあゆまこ

子ハ分字ニハ只ハあゆまこ

子ハ分字ニハ只ハあゆまこ

子ハ分字ニハ只ハあゆまこ

子ハ分字ニハ只ハあゆまこ



のしけき

新勅  
五の格と云ふか  
七の格と云ふか

この字は身字と云ふか  
小いゆゑに化催へ体字と云ふ

今に  
誰  
一  
一

か  
一  
一

月のえり  
一  
一

そ  
一  
一

語  
一  
一

この字は勝計と云ふか

候  
一  
一

た  
一  
一

月  
一  
一

あ  
一  
一

あ  
一  
一

こ  
一  
一

ろ  
一  
一

を  
一  
一

又  
一  
一

待  
一  
一





とつてゐるやうな

（注）はたしてゐるやうな

はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな

進まぬ悪行は、まゝに悪行、をなすべし

（注）はたしてゐるやうな

はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな

下巻は、分るやうな

又、（注）はたしてゐるやうな

（注）はたしてゐるやうな

はたしてゐるやうな

（注）はたしてゐるやうな

はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな  
はたしてゐるやうな

（注）はたしてゐるやうな  
（注）はたしてゐるやうな  
（注）はたしてゐるやうな

あまのこゝろ

又いふに...  
しんじゆ

舟...  
の歌

は...  
の歌

後...  
の歌

け...  
の歌

舟...  
の歌

しん...  
の歌

又...  
の歌

詞...  
の歌

名...  
の歌

け...  
の歌

しん...  
の歌

舟...  
の歌

舟...  
の歌

又  
しつこくも祀りし事あるを  
しつこくも祀りし事あるを

こころのなつかしき事ありしを  
こころのなつかしき事ありしを

舟楫はるかにありしを  
舟楫はるかにありしを  
早晚ト書

御舟が御舟ありしを  
御舟が御舟ありしを

よのふかき事ありしを  
よのふかき事ありしを

四月  
ありありと書

御文ありしを  
御文ありしを

塔  
大江の岸ありしを  
大江の岸ありしを

こころのなつかしき事ありしを  
こころのなつかしき事ありしを

かきかきし  
かきかきし

かきかきし  
かきかきし

けあきの御舟ありしを  
けあきの御舟ありしを

御舟ありしを  
御舟ありしを

御舟ありしを  
御舟ありしを

御舟ありしを  
御舟ありしを

御舟ありしを  
御舟ありしを

御舟ありしを  
御舟ありしを

以上四十一條  
上巻終



